

## 第2学年1組 生活科学習指導案

場 所 2年1組教室・観察園

授業者 栗原 さゆり

### 1 単元名 大きくなあれ わたしの〇〇 ～はたけ けんきゅうたい～

### 2 単元の目標

畑での栽培活動を通して、自分の野菜の育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけながら、自分の野菜が生命をもっていることに気付くとともに、親しみをもって大切にしようとする。

### 3 指導にあたって

#### (1) 教材について

本単元は、生活科の内容(7)「動植物の飼育・栽培」(9)「自分自身の生活や成長」を中心に構成している。子どもは、1年生の時に、一人一人が自分のアサガオやチューリップを植えた体験を経て、2年生でも自分の〇〇を大切に育てたいという思いをもっている。本単元において子どもは、自分の野菜を栽培する活動を通して、毎日が発見や感動の連続になっていくことが想定される。継続する活動の中で、自分の満足感だけで活動するのではなく、植物の立場に立って考え栽培していくようになると考える。また活動において、試行錯誤しながら自分の野菜へ関わる中で、自分自身の成長を捉える機会にもなる教材である。

#### (2) 児童について

1年生の時に2年生との交流の中で、観察園を『はたけこうえん』だよと教えてもらった。子どもにとって『はたけこうえん』は、学校探検を通して何度も通い、学校の中でのお気に入りの場所の一つになっていた。A児は『はたけこうえん』での栽培活動の目標を学級で立てた日、授業が終わっても、給食を食べた後も、ずっと『はたけこうえん』を眺めていた。教師が「何で外を見ているの」と聞くと「何を植えようか考えているんだよ」と話した。そこで、昼休みは『はたけこうえん』に出て、実際に畑を触ってみることにした。A児だけでなく、ほかの子どもも来て「土があつたかいね」「ぼくは、サツマイモが好きだから植えたいな」など、自分の思いを友達に伝え始めた。1年生では、全員が同じ植物(アサガオ・チューリップ)を栽培し、友達と共に栽培活動に親しんだ。2年生ではその経験を生かし、一人一人違う植物(主に野菜)を栽培し、友達と協力しながら自分の野菜を成長させたいという思いをもっている。また、2年生では、自分で選んだ野菜に関わるからこそ、自分の野菜と友達の野菜の違いを考えたり、栽培方法の違いに目を向けたりと、試行錯誤しながらの栽培活動になると考える。多種多様な野菜でも、一人一人が大切に自分の野菜に向き合うことができる機会につなげていきたい。

#### (3) 指導について

第一次では、畑を観察したり土を触ったりしながら自分の植えたい野菜を決めた。B児は「きゅうりは5月に種まきをするらしいよ。種から大切に育てたいな」と学級全体に伝えた。それまで「簡単そうだから苗にしたい」「ピーマンの苗を植えたい」と、漠然と〇〇を植えたいという思いだった子どもも、B児の考えを共有することで、自分の野菜の特徴や植え方に興味をもち始めた。その後、野菜を植える時期や植える場所(畑やプランターなど)を考えたり、種植えと苗植えどちらを2年生としてやってみたいか考えたりと、自分の野菜と関わっていくことへの思いを高めていった。

第二次では、自分の野菜の成長のためにどんな働きかけをすればよいか、子ども自身で考え行動できるようにする。そのために、繰り返し自分の野菜と関わる時間を設ける。その際「ぼくの〇〇は、だんだん葉っぱが大きくなってきたな。もっと茎も伸びてほしい。どうすればいいかな」「Cさんの〇〇は、前よりも茎が伸びたんだ。どんなお世話をしたのかな」など、野菜に対する自分や友達の気付きを共有する時間も繰り返し設定する。さらに、日々成長する野菜へ関わることで自分の野菜をより大切にしていくための方法とタイミングを考えたり、思いをもったりしていきことができるように環境を設定する。このような適時性のある野菜への関わりを進めるために、野菜を世話することに加え、野菜についての知識を探究する機会(子どもたちは『研究』と言語化している)を設けていく。具体的には、本やタブレットで野菜の情報を調べたり、研究ブックに野菜クイズを書いたりとその子どもらしい研究を進めていく。

第三次では、自分の野菜を収穫することに加え、これまでの自分の野菜の成長を野菜日記や研究

ブックなどで振り返りながら、自分と自分の野菜についての成長を考える。その際『わたしの〇〇ものがたり』として心に残る自分の野菜のエピソードを学級の友達や2組の友達にも伝える活動を設定する。振り返りの活動も楽しむ中で、自分の野菜に対しての親しみや大変だった思いなどを自分らしく表現することができるようにする。

#### 4 単元の評価規準（総時数 20 時間）

##### （1）単元の評価規準

単元 の 評価 規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	畑での栽培活動を通して、自分の野菜の変化や成長していることに気付く。	畑での栽培活動を通して、自分の野菜の育つ場所やその変化、成長の様子に関心をもって働きかけている。	畑での栽培活動を通して、自分の野菜へ親しみをもち、大切にしようとしている。
小単元 の 評価 規準	① 畑での栽培活動を見通して、自分の野菜を選んでいる。 ② 畑での栽培活動を通して、自分の野菜が日々、成長していることに気付いている。 ③ 畑での栽培活動を通して、自分の野菜の変化や成長していることについての喜びに気付いている。	① 畑での栽培活動を見通して、自分の野菜を育てることについて想像している。 ② 畑での栽培活動において自分の野菜が成長するためにどんな働きかけをしようか考えている。 ③ 畑での栽培活動において自分の野菜に対して工夫して働きかけている。 ④ 畑での栽培活動を通して、自分の野菜の成長を表現している。	① 畑での栽培活動を見通して、自分の野菜を育てることに期待感をもっている。 ② 自分の野菜の変化や成長に気付き、より楽しく畑での栽培活動に親しもうとしている。 ③ 畑での栽培活動を通して、自分の野菜へ親しみをもち、大切にしようとしている。 ④ 畑での栽培活動を通して、自分の野菜へ親しみをもち大切にしていたことを基に、友達と進んで交流しようとしている。

##### （2）指導と評価の計画

小単元名（時間）	学習活動（時間）	知	思	態
はたけでわたしの〇〇をそだてたい（6）	・はたけこうえんで何を育てようかな（2） ・はたけこうえんを見に行こう（1） ・〇〇を育てたい！どんな準備が必要かな（2） ・種を買いに行こう [校外学習]（1）	① ① ①	① ①	① ①
大きくなあれわたしの〇〇（11）	・はたけの土を耕そう（1） ・種をまこう（1） ・わたし〇〇をよく見よう（1） ・わたしの〇〇のお世話をしよう（2） ・野菜のための研究もしたいな（野菜についての調べ学習）（2） ・わたしの〇〇けんきゅうたい（本時2/4）	②	② ② ② ③ ③	② ② ③
わたしの〇〇ものがたり（3）	・わたしの〇〇ものがたり（1） ・わたしの〇〇ものがたりをつたえたい [交流活動]（2） （※ 収穫は、各自、野菜の収穫時期に合わせて行う。）	③ ③	④	③ ④

#### 5 本時のねらい

##### （1）本時のねらい

自分の〇〇の現状から、どんな関わり方が適しているか考え、実際に自分の〇〇に対して働きかけることができる。

(2) 学びを深める要素「教師の見取りと子ども同士の関わりを支える働きかけ」

適時性を意識した野菜への関わりを促す教師の働きかけ

子どもは、自分の野菜を決め、その世話を真剣に行う中で「朝は水をたっぷりやろう」「まだ芽が出ない。でも待とう」「Aさんの〇〇は、葉っぱが大きくなってすごいな。Aさんのお世話の仕方を見よう」など日々関わる中で、自分の野菜が成長した喜びを感じている。一方で、時に、想定外の野菜の現状（育たない・枯れるなど）に困ることがある。しかし、困った現状をそのままにせず、違う世話の仕方をしたり、友達の考えを聞いたりと試行錯誤しながら自分の野菜に向き合っている。そうする中で「ぼくの〇〇は、まだ芽が出てないけれど、Bさんの考えた土やり作戦を試してみよう」「わたしも植え替えをしてみたいな。でも、わたしの芽は小さすぎるから、まだ待とう。今日はC君の植え替えをよく見よう」など、自分の野菜の現状に不安があっても、友達と関わる中で、自分の野菜に対して、肯定的に考えて関わるようになっていく。このような経緯から本時では、自分の野菜の現状から、自分の野菜にとって今何をすることが必要なのか、もしくは何もしないで待っていた方がいいのかと、適時性を判断しながら関わるようにしていきたい。そのために『自分らしく〇〇を世話する』『〇〇の成長を待つ時間にしたいから～する（研究や友達の世話の観察等）』と自由に活動を選べるようにしていく。そうすることで教師は、子どもの野菜に対する思いを見取り、子どもの困り感にも気付いて対応していくようにする。子どもの困り感に寄り添う際は、子どもの実態に応じて、教師の直接的な言葉かけだけでなく、見守る構えを大切にすることで、友達同士の関わりから自分の野菜に対する関わり方を考える機会もつくっていくようにする。

(3) 指導過程

学習活動・内容	時間	○指導上の留意点 ◆本時の重点 ※評価
1 本時の問いをもつ。 今の自分の〇〇には、どんなお世話や研究がいいかな	10	◆ これまでの活動で自分の野菜の現状に合った働きかけをしてきた子どもの思いを全体共有することで、本時の問いを見出すことができるようにする。そうすることで、自分の野菜への関わり方のイメージを広げていく。
2 問いを基に、自分の〇〇への働きかけを考え活動する。 <働きかけの例> ・ 〇〇をよく見る、触る、かぐ ・ 水やりや土、肥料のやり方 ・ 日当たりについて見直す ・ 友達の〇〇と比較する ・ 友達の働きかけを知る ・ 自分の野菜を研究する (研究ブックに表現していく) 等  (子どもの思いの例) ・ 友達の〇〇は、ぼくのより育っているな。何でだろう。もしかして…が違うからかな。ぼくも…をしてみよう (働きかける) ・ 今日は、〇〇の研究をしよう。水やりはどのくらいの量がいいかな。朝と昼と違うかな。～(本やタブレットなど)で調べてみよう。(比べる) など	25	◆ 自分の野菜の現状に合った働きかけを子ども自身で考え、行動できるように見守る。そうする中で、自分の野菜の変化に対する気付きやその変化に対応して行動しようとする思いを価値付けることができるようにする。 ○ 価値付ける際には「その方法いいね」「Aさんの〇〇の葉っぱがいいにおいだね」など、共感的に働きかける。そうすることで、子ども自身が自分の野菜の成長に気付いたり、野菜への関わり方を考えたりする機会につなげたい。 ◆ 野菜への働きかけにおいて、何をすればいいか迷いのある子どもには、教師が直接働きかけるだけでなく、間接的にも働きかけていく。間接的な働きかけとしては、子どもの実態を見取る中で、友達と関わる（相談する、友達が世話する様子を見る等）ことで、その子ども自身で自分の野菜への関わり方を考えることができるようにコーディネートしながら見守る。 ※ 自分の野菜の現状から、どんな関わり方が適しているかを考え、実際に自分の野菜に対して働きかけることができるか。(行動・記録)
3 本時の学習を振り返り、次時への見通しをもつ。 ・ 友達と〇〇への働きかけの情報交換をする。 ・ 自分の〇〇日記を書く。	10	○ 気になる友達(同じ種類、違う種類の〇〇)と互いの〇〇についての情報交換をすることで、自分の〇〇への今後の関わり方を考えることができるようにする。また、自分の〇〇日記を書くことで、自分の〇〇への関わり方を振り返ることができるようにする。